閑田文草

壹

函番號	種別	番號 所別	月日 購入
號		號	月

914.5
317
Vol. 1

花鳥亭

五千八百六拾五番

我友伴翁之於國文。取法古者。救弊近世。且倣漢文。主記事與義論。各分其體。故集中有辭有說有序有論辨。衆體悉備。實爲一家之權輿也。面蒙提誨者。或設宿題期會日。或乞雌黃事問。難體裁日進

可觀者不少。唯恨遠方窮陬
之地徒劬傾葵。偶得其稿傳
寫多謬。有隔靴搔痒之患。是
以門人某等與男資規圖之
校合上梓。欲使海内同志者
娩宗師首倡之美也。因乞之
翁。翁辭曰。近世儒家者流弊

風。得一句則刻一句。得一言
則刻一言。自謂不朽盛事。不
知爲他人所覆瓿。雖道不同。
汗洽肩背。况我國歌者流。自
撰其集。而衒諸當世者未之
聞也。資規以此言語余曰。岳
翁爲吾説之。余他日語翁曰。

子產聽鄭國之政。以其乘輿濟人於溱洧。孟子曰惠而不知爲政。君子平其政。行辟人可也。焉得人〻濟之。纘曾稱此言。翁念如之何。翁笑曰。子爲誰爲說客歟。是謂不余俾文集鏤板行於世。如夫十一月徒杠不成。簇踵其門者每人而教之。日亦不足矣。纘曰然。翁齡既七旬。勿固執己守小節。請從資規及二三子之言焉。余亦記此言題其初云。

享和二年壬戌仲秋

石見處士浦世纉撰

第一中學校印

○かだの翁はいはれしなげきは。文章廢(スタ)れていく而(モヌ)
とはなぞ。世にこゝろ足をあつかへす人なきのみならず。さし
物書篇(アヤツラ)もひとは軍者(?)の裏はわれだにはゐふよみうたの
さなまら擬言(タハコト)にて。歌の詞しかも思ふなどいふ陰(?)にさへ
るしく。かのけり(?)義女(ヲミナ)の路しるき古地(コチ)をといふ〇利し。さる
翁は我が國文(ソニツフミ)世(ヨ)にある記文(ウツシフミ)童(ワラハ)の諭(サトシ)なといふものの
を著(アラハ)し又吾門(ワガカド)に遊(アツ)ぶ人はいふあやまちなす(?)せあるを
りのまなぶ。年ごとにいく草をゑらびあまたの企(ツトヒ)をぬるこどを
催(モヨフ)してあるかしど我せをしひしるふにても。又はいく遠(?)
ひるなどすすむも。あしくも此の(?)のこ。あるといふ

ものゝ数はあらきまでれ。かくれは恩にしもする
あ初学(ウヒマナビ)の輩(トモガラ)はんばかりしずみて詠みかけて
足あしき律もくのあなにが。たちかへりちりてあるは
言の葉をやすらぬ。文字のすがたくしきをば
やすく律がりかんわりふほとも。文(フミ)やりたへて梓に
乃ばそれ無字れへきからせといきむ。活路よ
かならずとくらべきりとはいひはもなずわる
みね文のつどきの也躰ゝ美をあふかおへりば
哉の本みと律ども気ゝ足が悲りありてつきまん
こそ作るもかくもといへり。文屋すんり意えも

作よりねがふ本意なれど。それまだひとたび人にかゝる
殊更ぞ。やがてかぞへうちかへしすいそく。たゞ和
もろこしむかしの哥(ウタ)に文(フミ)に巧みなる人をゑらびかゝり
はくれるも乃を梓に上果保する常(ツネ)にもてくす。
本おりにおきくそ生(イキ)てあらよたゞたのしくする
業。世にさかもあらんしそせりし。文もすゞしき足が
はらわずるそのあばけてをもゝもとより拙(ツタナ)きも
のまとてゆきはなぞ。されどくやつがれも供(トモ)にむすむ
らく。歌よ人もよむものとて詠んばらしけむ常も
ば。ひめおきむもはゞかり。ぬくはかくもすそむき

掲(カゲ)てしるへ捨るのやうに入れば。はたまねぶ人多かる
事もよすなるや。既(スデ)に一書のはしの中にも
せむをとらえぞて。漢籍かなの本にみやしはしたる
今の書にいふ事也。芸(ワザ)母すいくばくの色ひ
人々あらぬ義と。さひてやかはあるかなに。しらぬく
あがら甲ぶ称ありはあらで。ともかくもとれかにかな
ほどよ
○道の説のみ悠ひは多かれど。なかなかしけるば
のぞく。あるはむとすさすそれて書れし序跋
乃類むね文に引きたる世に公にあらしもの母のぞく。

世かくあれどはつかに一二篇あまりはむねとせるもの
あやまりは思ふ所ありあれば省けり
○元(モト)来るに律氏。あるはそて文(フミ)のほどひの頭(ウハガキ)より
ときれしにて。擬識擬頌ごときのみゆひをはつらば。
ことに紐(ヒ)乃綴(ウミリ)まずとまるべからず決。そ綴ぞて。よわこし
はく文字(ミ)にそれのく姿(スガタ)し背面のかいをはなれあり。
まつ韻字あるもの定めあるを。また是に平仄をなく
のこるぞそてわりてれぞ也。しかしてあきとも近世(チカキヨ)こなすふで。
絡とりふあみのこ思るも。こそ名のよしをちるはれさ
るにて。作といひそへゐるかぶひえみえねど。かるてゐの例(タメシ)

はえあらず。なほいはゞ。万葉集ハ長哥賦比を
題せられしも。古今集乃序の六義の詩緯にあてし
ほども。かくましてはさもあるべし。又ある人韻字
を踏(フム)よしぞ。古きにてぞ。ものしたる人ア下。五十
音の様(ラム)適をもてなべて韻ふといひ留も一句には
もじと見ゆれども古くより有ることなれども。
一篇の言をとりて。假(カリ)にまでらるゝがほどなり少(スクナ)からん
ら。かゝぞえりへ。総(スベ)ては。詞章(コトヲシルス)と義論(アゲツラフ)のあはひ別をい
でざるし。作りはこれ本基(モトヒ)なるを

享和才二年歳次
壬戌夏六月既望

男直樹伴資規書
於安得舎南窓

閑田文艸目次

巻之一

辭　二十四篇
擬説　四篇
擬解　五篇

巻之二

序　附跋　二十四篇
擬辨　二篇

巻之三
擬箴　六十四篇
記　十七篇
記事　一篇
擬論　二篇
擬頌　三十四篇
巻之四
擬文　十二篇
傳　三篇
擬賦　以長歌充之　三篇
擬銘　四篇
擬碑　壹篇
擬書　九篇
賛　十三篇
巻之五
雑林　門人等文集

目次畢

閑田文艸巻之一

蒿蹊叟著
男資規 仝編輯
門人 等

滋賀縣第一中學校印

辭類

春暁

鷄の八こゑもわきてきこゆるやとのふかきやゆふつけの声
たちのほる雲のけしきはくれなゐのひきまはせるやうなる峯
もかすみわたりてあかつきよりもはるかにやうやく
おほろなるに成ては野山の梅さくらに出かほれ門
をひらき柳もうちなひきてはなやかなるけしきそ
あはれにみえて鶯の初音もしつかにきこえまさるほとの

へらやうときめしまゐらせりさらにむねをとり
かゝる御法は中々のうちはようことなきゆへにこれを
の人々さらにこれをうたがひをなしてもかね
はじめあまねく大かうひろめたまふべしとぞ

花辭

よつの時しめぐる舞て六郎の中に仏ちくたぐひ
花ふんなるべきとそのはふまめさくまのことわる
いろくもさらにそのぎし海や彼にふる人の船の
誠にもつきれりましうつも舞のきびのあらずべ
うしねがふり今もきこれみ誠してんにかくぶりの
所につていることもあさはりうん国つけきふして

まゐもめづむしんのうたりようれしとくろかん
ええて候ふものあらたかにみけれことのぞ
人のきかりはいつくし神代ともいふ年よりの登場る
きらとたへ給ひし舞はやがてこれをふのうへにも
うくうかくれさはな一くちそもあるとて
するきのこのんもそでやしくひらき
くしきはいつのるを郷やさくば
ふぐやうはいるきてしけ人々ひたまふれ
らしまうたくちとて逢てよどめひつれはあれ
むろくそとほどへ舞てのまきとのぐならは
けふ舞ふ人のふしとも心ふくれたうくうつられ
しふのかさへたつぐきしきおぼえもつひゞたゞ事

のこしけむ

粟田西村氏の花に題する辞

西むら氏の庭に一本のさくらありけり本はいにしへ
わかき人の植おきたるにてあれは新の
さくら中にもころうつりなきさくらなどのうつり
みなもとのまさかたのうへにうつしてまつりで
きこつみに翁をとり二十とせあまりを経たれとも
かくもよの家の伯をそれよりかくぞものすう
ふくするものはさびまゐらる事を人もいひならし
あらしばかり今はさきそれ肖光二つの法をも
こもれる人にもまもらせうひ館のくれ
むかしびとのたねなしさく風まちに梢あきらに
たちわかるゝぞのさくたに咲ける花はまたさらに
うつりかはるものこゝろに君を千代のまつ
もえさえそめて

はるごとににほひそへゆく宿のさくら
住人のいつの代のためし

春の虫　當座

むかしもろこしにありしその胡蝶の夢ならふ
けふゆゑ葉の花に訪ひてそをみいれげしかば
もおもはさてそれにとりまぎれぬ蝶のくれなるをみける
あるいのあまりゆきかよふはなほまたさしこ

ちとけるにハしくさけりのあさとハりてハまゝん
かけろふの花のいのち山の雨にさやくかくしあるかゝかすも
いろさまとにまやうかいしう降くやなつん於なき
あさられにちりとめはつうかはかるとこれハ古今集より
おもさはまつみなのやにちとあさかるもいきこといかふるゝ

遊山里

花ちれる水のゆたにしてあはれをましぬるかなく
なかめやれしう次まるとれりつやうなる様ともまさ
えももれす花のすゝむまの紹へ音たくひなきあはれ
なるふほとゝきんの一こゑもかなしさころにうけて
ゆく水ちのはるゝた旭のいうさかけ落しりた

ほりける家ともゐえあるハさしよの露とのうれしき
なひかるゝ人乃おつるゝやとすかく〳〵つらつ秋さる
女の身やしけるゝ伯楽の妻ともなく涙見ても の
たつさへきてるも俊蔭かうきとさもおもふれそ
さはおく人そうやとりやとしうしてくるゝそこそゆ
きさそくるゝ首代りたる山田のちゝ町こえてある
はちゝもふりやさにゝふりたゝこふきむ人なすき
より出ましらすハよおぶさもおもりしこゝ人なに屯
のこしうちやむきまあうさまさそりにむふうぞる
けらめもたつるんハ後きりとやふてんふとつふやけ
ハ女ける人よりもなつさこゝとくさしくみなとひつゝかる
は老乃くせるれい人そて節まぬ山そもゆきつゝう

もの思ひし出きへよりもあはれましおもひこそくれ
都乃花はてのちもおもふはかなさはけふくらき
はるゝとも山にすみても我ものは行
そこ思をといはいかんな

大峯の初山入する人をよめる

まよ日のひかりさそひくる人も後てさらじ
きみ花のくせれなく眠乃さましもふみたけき
や月の山の峰に入るるにも月出るさきてやと
ち雁りおりて遠垣（スイカイ）のひかりよみかれは螺（ホラ）の貝吹
てよりのきつでれ初山入するなりくらも名のしおふ
花の露おけふのはつるてりとあさしきさゝなん

いかびらのむ人はふみわけかはせん此月の八日まで
山臥の宿うとおかるさはどこの寺にもふものの訪
尊者得心はこの二のねん入のけり越郎く身けめ當
とつふとけりめかひしつよ道も楽して相続をも
あはれとおもひ山にしもそよ年かひしを出すくは
千時何中のひとのちにつゝの卯月乃はさきなふつ中よくん
今も山寂やさてはしれ揃る者も尤遍くるれはしくあるきれ
の人はつゝみ紳もくなれとたちあるもうきさゝれ
あり花かなるにもへ人あくねはいへるんりなし
さきは〻をけゆりきは
やとつゝくわけ入のされうちしききし
まゝに〻にたしのふらるもとらし

霍公鳥

卯月たちぬれば春は左算にうつりて世の中はみなれて
らうらうしさをばしのびしのびにゆくもあはれにまさ
るはほとゝぎすなりけりあるはつれづれなるあはれさをし
くもりやらでなげくよの中をまちえたるよも一声だ
にきかまほしきものとなどもなくしもせちにまたくるはつれ
なくてはいつくれなんますらをもこゝろあるにたとへき
きこえひとや世のふりねまふなんとするかゆゑに
ふるとかうこしたる杜鵑魂なりといふかなし
何しとうちはなちてあかりやらいしるに何さのも
のあさましうやみかれて旅の空のくるしさにふす
てふ血になるなどいふるも中々に哀とも見えず

あつるわかもそたゞひとはおぼつかなくおぼゆる故
もろこしにてはほとゝぎすれふをてなんなきけるも
まさけちあかりてたゞうるさくあをあやしく
ありたるるまゝにめづらしといふといふかなとや
ほどふびきもなし深山の梢とこえてのどかた
りはまくふとうきふそりて千年にもいひたる
いろかゝるものゝけよのなかにもおぼえぬといふ人もあり
しかれば三井の後の山ぞこゝろしるしみよ
のみちにはなくふ清ふなるに日くらしゆえ
岩ねるるかに二こゑ三こゑうくれなゐの色
あざやかにみくるに岩ねはなみたにて見え
えぬれどもなきわたるゝもたゞひとへ月じ

ちるも手向のころにふかくしとこそいはれかやて鳴
けんたちてはせなかやりのはさて笑ひにけれやそてたふ
涙さし夜をも暮しゆうしゆかくれ歌人に
きくの花やしたものふるものちぎりやらまれざ
らんとはいだされしは久しきことなれど人にけ
のこりけり

ある比のひとりごと

ひとゝせ卯月に国の守も東へくだりつきぬ
ほとゝぎす雨ふれども人もうちきみ御所にまつりき
にかゝりて書ふみもこまかに下りしは人のこゝろ
有とも覚えねども、まだなくもやさしくなりけり

わか身にはいつとなくまさりけて出家とてもせざ
何ごとにつけても世の中のつらさにふかくやしたふ
ともあらぬこともなけれどわれもさげおもせざる
あはれ老かるかたにまかせて見聞につけてもなぐさむも
をかしきもはかなしとおもふ事ありさまは思ひまうけて
人のうへにもはかなく出家せしとおもひまめにけり
ぞもおもひ出すものゝあはれやおもひやらるゝ出
ことわりぞたゞよそにこそはれてくしひとつのこのたゆれ
多くおもひまうけたるさまにありける老いらくのかりに
あはれはかなき筵にもまつりゆく数まちてこの人のひとし
うきよのかたみにもあやまちて涙とふるものはれ
世のなかはかなしきにもかぎりなくかなしくもおもふ

命は万の大かたにも何にかへむ身のほとにかねとして
わかれとはいふも人のうへあまてわつらふべきこと也
人もありさまのうちゝれ末をけりつらねそ
の人これ本の行つけそするほとわかきへのた
おりひとまうしふか海にそらにひへと許さし
そ世の人の歎のきるべきうもなきまかく
とうひとりこつてとまる所きたき日も夕にふり
しれ露たれとしやたゝに従されておのれもや
ど人をあて酒かきやかにはやかてもさきされ
おはらべきかりもふるれとつられてとまきて
かれてきおもえてしつれとおかくのえとうひる
はさうたきのやまめとはまれもさけるん乃

めてうかうきよけるより

納涼

土さへさけてるけもやましうけるひゆく比
おりし見さるらしたゆかくつつてきそてはかをも
めれいしその夕の月のあまりありし一節吹せそ
たるかせれかりしときへせばおいてもうちみな
て何人もまくらすてつけよふくれてそやうは
うたもきこへね猶み草むしのひるまれむをし
しげるかもてふてさむちぬべうさ露のわたるそてきりく
とうちゆうに秋とまつらさる此の山のひやうたりか
きよすてん中へかきりなれのく月ハこつしうかく

たゞにやこよりうつりきぬるをとまらん時をまつ風情ひとつ
ゐなかしたるものとてやつれたるふんきやうかにも
のりつかれてるゝにうらおもひつけたるもうかしきを
もまづけしきあはれなりけるとぞいひしことのはなしけるとて
つりひるみなみくへんとて水はひさゝぐことものうし
されば夜のへうの水ぎはの日なりてとぶらはんとかへ
波のうへにさうゆるなきにはもゆりしこと思ひつる
人なかに何のとかの浪山の方にかきて又はゆくに
のほとりぶふこれふみて道ふるとおもひめぐらすに
記をかきて中にも川の流の人しげふきそひわたる
くべきうしふかきちくめる色でうかりて川のそいづこ
もよろかしからずくらふにまとなきつゝ所とも木ち

をみならずや水のなみるなにこそゐてきこゆうなる
まうはともしるふるには夏のくもの空気のひかりのてき
ちよ無子のうつもうしやまれぬうけりのをしいつくしみ
まさしう夕ぐはしぶのかしもそぞろみくれ物ごしもなきさ
ちまりてけるへつかのなのへりの、ゆるをりせんかな
やまじかぞのや、ゑはゆみひきうきくのおもわるゝも
うちものうさん。おうのうして人ある夕ぐほの
かげみゆくらんやなかぞめたれにもとしうすくとまを
いらこ身はかくにそさびむさはけらや月のかつの
さらしもまくしきうもつかのかみよしの
あらはれみなれはそのうふあつうれても
しかくるしうなちのうつらの扉のかうさまつかう

いつもかくしつゝかはりぶらたなきをうつくしい御せで
おほかたのものゝたぐひにもまさりたる秋の花
ちらん巨椋(オホクラ)の江のありふるよし聞えて侍れば
さらんにやさんの哭あるとかりふみたてしといふ代
草それもかくきこえまいらせ候ぬ

秋乃野をとひくる

文本集に野べは花のれ草への名へ乃花
そよ野べにて香はのうつれし又浪人今年の
いよいようかりたる色ひとしきの四方(ヨモ)は乃けしき
まれてかはれはまるよろしひとゝも立はづさん人
さはあるかくは田畠も衣をひきて百草乃花

うるべきふかなんとくれきこはなは山科乃りかり
栗栖野なとは秋のすきをとりくる人の氣たかくもれは
まじ言葉ゝりもいとかりてふたゝびはる落を立てあ
きり夕日のかけうつさる露乃かけてもさまをを
そばらなるうつり入る尾もこぼれさるかけふ
初草てふすのを見つけさるしてさゝいつせ
秋よろたゝれるはいわれしれはいけいいろのうき山乃
うたてかけまさをもとは老のあはれ乃名たくてかす
むべくもわたえるとはもの乃てそ野かれ乃けちて
人わとふいは竹のたゞ花ゑんでたるべきを老てむ
さわるんのまちたるなうしやてわりきんて八りふな
みすへいつれもはくみづべいりさうてひろくるとうた

かゝるつゐにやてらのあらんわづかなるけふの世のもれ
ちよつそふへかりてなんふ

里祭

霜月ちつきはいとなくの氏社まつりさとしれ
わきて二日十日廿日とておがむ風乃もつてつひも
ふくりせわらくかたさ中にみてもききくふ
かうもむたりはのへゆくにつぎさるひまうりてらうび
だるを設くりあくなるあのうの色ばかりしそうやく
さうにてうしなてふひよる見かちひつむさぼりの
すさふくとの手ばらいりるへたる社僧まうり
なるはかぐられてるしの声ぞつなるを奏しあるにけるを

ひしくてよめくもありえちだうりの試ぶふるくて
ちぢ里みやとはじめ老たるもわかきもそぞろに酔ま
うちつぎ酒よ色ひさかさのうしはしめたなりさひ
のあがめりを大事にかゝりあまたのちらと社わざと
みすくるもあん日こいつ中くかもまうりの出ばやけぶり
神宝合のきうくしきよりものゝ中ゆたに家々酔人
を杖(タスケ)に帰るとゆゆるかろこしれ社日のさるちく
うたひて社もうれしとつくてふりさるゝらんう

雪中山寺

常矩

我こつきの種乃ひびきのゝそうあぶなりてゆけるを
ひやしはやり戸引あけて入れば庭の行ぐに雪そそう

つかりにあり檀をまどろうたまじけれどもまつけて
ちはかんやとばひえの山をとかとどの子ねいとしふ読んを
うけたるやうあうにありけれあらき檜つむ人それにとつき
いうふらんとおかひやうも弟子つむこうちをまんて呈の
むかりのきうしきふつけを俗への腕八るれい山なむ
出あひし其面の稽古肉つけ骨おうへなりなむ
さくあ不けるくりうちひ也

大鷹　當流

仁和乃きのおかとうりふ左京の中納言大たの
かひあそ狩衣に鶴をぬいたせたるをきつきるま
いうし乃弟やひてなつりし東野乃小将は狩をる

あれどなうまびうろ人みきとうれい小さらるのふきさえ
きらうて作おひさうつの業平おそれ狩をとかせそ
酒をのと呑つうんれども天に冬くはらして付つうる
雪おうれ咲きく野ん放うしとも行もいかざらん方の
のとん心をもをらん方つうどのちきしるふと御そひやうも
いきぬしく犬乃飼のあはやうに鷹の腕乃きうく
しきうもかりつ犬たの狩てそて

手を洗む　當流

けどもおうこその飲あるふとうりいきつ五人もなけ
良ぐふへをとうてびうその山をかかしむれかりしきも
みうう所つものうろ不あしどか甲斐氏の

花は根に鳥は古巣にかへるとこそきけとゞめて手をたゞ
にすゝむ夏の夕ぐれもしのゝめにかへるは尾花が袖
の露月とゆくもこゝろおかれぬなにたりて一とせの
つひにくちはてぬれんとてもふたゝび老ぬれば行事
につけても人のあはれにおもひ出しもたゞ木の根に
かへりぬる鳥のさけぶも秋ふかくてこゝろえぬれ
やしくれぬ花の色もありけりいつしかなほ
月日もたゞゆきかへるのみにして

遊小松谷下村氏別墅

ちかきん友年ごろのよしみをたるふみにありてもおさ
竹の籬の端家めかしくそゞろおかしく氏の家居に於て一
こゝは故正啓翁のつくられし茅屋のことに海
のまなびをもつはらとし亭のはしりたりしが
何となくさびしき木草までも情ありて見ものとする
もろこしには王維が輞川やまとには後鳥羽院の
の山荘などもやたぐひなきふる情ある風流
まことせちなるをとゞめてふかきすゞろなる
まね川きた入て次よりめぐりしもめづる風情
いかにとおもひよせ侍りし
ひとゝせはやなつかしくなりにけるを手をめし
昔のひとのこゝろさへそくむ
まう家の友あるじ正啓翁にひかれて友まじ
はりふかくそびまつりてめでし興し侍りし

こしはやき童ありけるが時おぼえ侍りけれハ四十
年まりのむかしなるもはゆかりにかゝれてこゝろあり
うれつはなきありさまはさび侍るにいふしへを
おりふし領(ミキリ)かうたへふ川しもをきぢれ侍り
なるふもむかひて
さめてちられ世中つく待き衣しものに
わかりしよかされやどのあちらぐ
右辭は一の年々かのうしに謝

賞山水圖辭

ゆきしくまりこのゝこゝとおきてはやしけるとハ丘
まゝふも七ちゝしもたもむ山のさゝずまひまて

絹ぶくろにむらさきをあけつゝれくるゝにもちゐる
けふるはろうよ山の春のゝ本ぶりに中より一すぢ
ぢの瀑布(タキ)落てたなびきめぐりたに打ちまぼろしれ
そのまゝ谷に入ぬしを同のかみにへとゞいひつゝ
廊をかけてかたちのかずのたうさまにもゆかしふれ
戸だちかげ林と岸やみえむしつるくゝかゝうきとゝ
うちつれそれにありにあまき赤き色つゝるハ桃花
流へ下るすは二月(キサラキ)にまつぐるもみぢてとうなさき
そりとそて流もなさき谷はおそき紙ももうひ
あるハはりたうもひさけざるの三きもさにうたと
ありさゞうけもよたゝしてかきのまゝやうにあるとこれ
いやうてんのあらにふりて絶えいづるもわされて

ふんられもまじらはなりされどもその子の母は其まさ
にならのさは富まかでもしまた人のふりてかうて
きゝりに人とよぶじもの子やしたかどらる
ふようとみのうちわりかすむくよ
やどりせしつるんそりは

耳順を賀する人ふ謝する辞

むかしよりそのうちこのさほどよでのかれしらどはし
めでたき十とせをとりちかうでもふきそれることはまる
ゆるだちは人ぞこそこれそのうちにそとつて
耕（カテ）をとつひやものふくみのよ人ぞ人つとすかわりき
きてしもはるしかれしるを尾法のつく

ひも桜井の翁乃ちかるもみをとりかうもむかしら乃
賀そのかりびのべてやさきそれはなるさつしめ付ゝて
こよりその人は園乃後とうるびつも入られば光そつゝ
いつくしめてもなほそののそとおもんはかりん
ぞくもあらかぢさ人乃そこと年をくさされふるとうら
うちすてたるふんいつはづつうちへなげたるよに
らふみのれつのけるみなどのに　れしいひて六旬の
よびの古稀くらるでまさもなたにあひやるし
はまさひめるときはまでうつのぬくされをま
きやさかひてたるん千歳もちきかきうしやうけ
してかへせしうにきひてさまにぬべくもあら
弦ばかりあるとまそへかえかかふやそらん

いとつくたるのくし身とともなくとも
人乃いふはさだめのうれしき
ちよもいはふ人乃ことはのなるなけれ
君もわかれをおしむ類そのしに
いざうちよせてしばのこゝろ人の情を謝し
けり也

長岡天神宮にまうで所思をのぶる

ちかき乃天神の御社にまうでけれどこのごろ
人のいひさわぐもことわりなるかなと思はじきつゝしう
こゝやひろくなゝりし也みなれまどかのつゝしめ西山
めぐりせしほどにけぶりをいふまりしよりだれ乃
ふたしなつかしみるのさぬ乃いとまのうりさるが都
ちかきにあれどもおぼえずゆうちかしたる時にある
まかなむめをとりて行て不在したるのこゝろ
わかたづねたるゝちかれど我よりひそとおそくおかくへ
ちそらかひきりくるちかさんふし葉田のうちなる
まざりしおほくのよろばおくとまりあくよのな
ゆめありさなからめしさるつくくゝの人乃ことをもまれ
ひだ乃ちらにさくかけてうちふかけるころは君のくせと
人いつらんう
ちりそとたすきりよちとひかるたに
神さびしのなりきまなざそ

こゝやかしこはる〳〵月のかけも思ひの
花のしやうしはこちらもわすれん

過ちかきて恋しさまの

宵庄

あはれはさしおけたる海の中より歌のかしく
のうへんをとふらふ事もなく玉つけるをこの
より八かうきけしとは玉うきにいりなかにおもひをなる
あるはわかかけるものなれは「文を古に手まいりける給ん
てをかへしけるにはふたりの衣乃名殘ようそ
うつゝをさるへしとりききれかぎりふかく候

名所鶴

[illegible]

鶴よころもくろさ裳の先をかりて野の久し
きうちにあはてよつはるまつて中の風浦丑乃友
はるの名をこそもつまして見えすし浦芦のあしう
大のえもかけやうやよれおよそあまのつき天は風
吹飯のうらふかくて千し井はなつきころかは音を
あらそふてもあつくわかけし候

北野の御忌まうでて忘ぬの文

そもつ神乃御代より五はやけるに住まいりて嘆
いさとうるにたらうあまさとをうくのつゝけ中ふけき玉あん
内おのはつはもまさひきて御のかうりさしはてしいは
神とは八かうからあまるてしはたくひすくるくなるん

御ぼえの花のふ庭ひハさゝかものゝりして御そこの恵
のうまれつきてうらをとうごろはほくふしくれさゝの
しらしてはじしに梅の世まつりしハ中ゝに御徳の
せありひろざる慕よして彼だいぞげうらの佛た
おけるくびひとやつてんこしハ百とと九之りふおさ
ら世紀かてさて宰府とそぶめ御社ある不ごよふ御
まつとつよめまきろくするけしもけ太郎ハ一夜のまつ
の亭しゆうた御社の流れくまセしよ給る新
なれぞこの月のつゝきりけばいちゝすゞ目に
ゑりとしはうて百の枝大をさまりもしるゝりぞ
何しやんがりハ八十よをのむつしもこの御まハ海
うでつるが数七ゝざれまをもつてうひ数乃

ともしの光にあさるゝあれいても来るく光ん
ゆたがおりられ文のうばれなきつての恩をもて
人もやとあふ志その

長坂長恭需みのりて二句を題し
てはなる辭

仁者ハ山をそのみ智者ハ水をめでて天地の
云の徳ふ意はえしねど人をとらてあをと
人のふあり才のきだなくて家に帰らざるハ近し
よもつさん長坂長恭が其人にしてこゝろびおを
翦のれゆざのよ世乃わざを迹まし花よろみの
だらま山のけ衣の袖をふ庭くし凪のはく月の

ゆきてにもかなづらはてもんゆくにまかられもふかり
ざれうたびごとも家乃ごとく浦出也乃ごとくつまら
んおもひみかりくけるれ家のまだらたらにたくの
ひかりを隠むおもしろちやまうをしる次

万葉集をよみてしへをと志也ず　尚庄

ものてにのうきはあふられうたゝをとゝめたりむ
めっことおけまし陶をとはじめしたるんえひつゝく
てをばうそ一ことのハ字乃ちうさおかりけさいて
言なかく世のを述さるへともこれのよ作品まかれて
人のよゆえなりてはあまさたてとづとやすやて猶さに
よくえさりけれど言をのをはしくちもかづゆくされ

まづは万葉集なるえしけれ大伯帝の帝代大
御宇をのせられたりつきゝてうつりゆく代々乃
よふかりもありつれなる中にゝとに藤原宮代よりはい
とりわきなんいでゝ人もおりけりやあまん〳〵のよ
代人のおもむけるまゝしさいまつりのはおもひらもあるれ
東人乃はよかりつらあるなど言代あらうかざるにも
あれど〳〵のおられるつもはゝなりかはりて此集を
こゝ世人は今は人乃まうとにかうてはすとよくも
わきまへじ古今集乃まぐさ辞のめでたには
さるものなれど万葉しうのうちやすまうなからさんと
出てこそ辞のむもうひはあるべうれしや一内人ふ
ばうへをとあつ人は此集をとふうとをあだうしせるよ

弔内池真澄幼女没辞

むまるゝ命のきはゝこの世のさだめにはあれどあまる
こよなういひつゞくもあはれなるはその中にあはれさ
ちもなげきぬべく歎しくてもとゞめぬべきはなえ
ある人のよはひうけたるおもひありさればこそしひて
もはや人のさはれなげきたゞさへふかゝりの始め
んその顔るはよの人をあふぞことへるべきかぎりた
あるのぞ雪井ふるゆるうぶよのみもやまだたくさんの
つくりしもさぐびみつあかぞかどしにつきてはえ
と歎しむくいへひとしかるべし内池氏のひとり
ろ女のともかの今年なつゝるうぐさぶ月中乃
なぬかりそめなるやまふなやみてうせ

給ひぬるとそありさなるかとしる房やらにかぞのあ
しより告(ツゲ)こしゝそゑうあとひくいふなきつ涙
みちてはへさらにしも子もやりまどへをもとしもえ
たゞあるかつるありかるをおそれおろの給
をしむくせあらかのゆかしげはらきて心のいり
くも子みなどえつるこゝはことさらたくひなくいと
ふもしらずな何事もひとつときてはさもは
よ次となりんかくしひのそこてまよふそらもなきと
つる此より小倉山の百首あるといふをみて征
勢源氏のあらまりをまでならひ年近くてそらに
おぼえけるほどの歌そのおりも何くれと古歌の心など
ねかいふしとよるへらうさいかりよなげきりとそいふる

たりむれどもしてくちをしおもひくらべにはまさりては
いふしはつるさもひよわてはそのかとともにとく
つまぜしこのかきてて上前は人にたかく侍りしがまさ
無げしもまゐらぶどものやうによくも也しもあるまず
乃かなりけ無露やよろこびたなく世にも無子やましく
このへんえいえれもなやしうさへ出ばえて
人もまず妻れよろしうり琴うたるうひとしらうきやう
あるけいこすさまに通ふるもおどけれ拍子してどもり
しなのでぞできこゆるらにてもゆうざえんおうよろこび
ざやよらうしうてしうくいふあたる面あるは世の言よ
なつるとよろだすちしづまりていかほしつあるまま
うつさふ事にさるとふもくまくつどられ也とはう

えんしるの前にそのか我やうなるはしえたまへて
さる母乃まめやうかるたてく人のいとひたやすもはぞ
やせきむしもよすへうはまりみなひつくる
それそうだ源のきみちん落しやらむつえあひこゝふ
せあさをしむんの保にとつけてうぞひさうり
まかしちとらも无のびかへ忠おまりぞけくある
さ川の事はまさしんやともおかへだよう人われ
そうだはえありるるえ乃のこるとうと年よみ初
なでさいふよしなさだ

擬説

蓮を栽ふ説

五江南金鈴庵日靖之

いふ乃坤れうとて池ありもてはやしてつくら
るゝところさまゝと惰るよ人の優得したるもを
まやらゝもなくとの手ふとしなすてなりるとし
秋ふふうつりとしもたむぐらうたてくひよ
つらどけ池ともおさむべうらしと事さげくは
うちるゝはみいうたとかりてのゝおれいくもよせ
おいけどうかんせむおうしてれそゝへちらんうゑ
んとともともこのはちんい佛のこちらんゆか
はのそうよへりしそのこゝと極るゝふ乃はらすぐん
ろもいちれもおとしてとらはるやうさまく

彼晉遠法師も蓮社のまじはりをむすぶ儒の
人らも縁びらるい宋乃周子そじめてやさち
すい花乃君子なるまてといふがなか紫よむ
露のむつりも潔きこころはさうとふべうりそで
なふうたむしらぬどもくとあはれさるいたづらお
うれのゝかく何乃うちたつきてもうてなされて
はちれおるもみふかい個猴うはもこ示ありと
やうえむうれとさいまでゐろこゝろざさいかつる
どきとしいさるちとしきすちるをいりくるにおく
なけ庭のうちいやも稱あるも萩楓ありてそち秋乃
人もつそかりかうらす夏のうけるゞかつらむいなん
むうしろはさふかへれのゝなりおゝてねようつきそ

こゝろとはましかば人とおもふがかくこそ人の情ぞ深き
と思ふものに説するは己がしひごとにもえこそ心のぞ
みそれは遊者はくのおもきの能さなりしかば山よりのぞみて
魚をとするさきとしはすこそひとありてはれども名をつゞる
ものの弁へ居をとうしたまふの心をしめ苦しみてかへりし
立らいかれど明らそうあるこしかも又しかゞ得かたく人
まねよいそんいまさんぐうし明ゑばやまゞ方の前を
かれつゝこのしらに山のへとのぞむとしるへし人は
何の心つかんとおもふをはからふよかつもこゝひたすらん
そんはなほんかつは候ありかし

風うるはこゝよりつし在所に出はまもし
うちそのすぐり日即乃白妙

山説

おのれやまざとへかうしよりたつるの数をとるまゝに
山ふかくすみてよく年してあそばずくよくさともなく
ぞあふぎたびしあるをりよりも木のまとはなれ
霞を誹れたとえびやすくみだれしまゝにおもふは
あそびては二とゞ乃花は桜をとまぢうすべきのつきうしき山
乃ゆきふりけ又は木曽路をへて姨捨もわすれしを
そゞろ西へ下り那にいそぐ比叡をこえびまでの暮りかれば
そつへでんるも嵐峯 龍門ふらでもまうで出まなかく
まぢりき山しろあつまのみなべてふ山しいくそこ
をもえて次不二法乃花幸くんるこそとみなけん
これがのかくぬうしろもなしなむそてはそゝろふ

おほよそものごとにそへてうたによまれしかんくせふ
よろづはらへにもこれよそへてとのへりしみだりがはしく
閑田廬とかやいへるの西にすみしえくりぞありし
こゝのそなうけし山鳥をとかやさうけしともいひしを
ごとにいはく菅家大臣のふしぎの筆づかひ南無とてこゝろ
ゆゑに日月の出入もかくしつゝ猶ふかくもいふなるを
花もさて夕の雲花にてもひらけば路には見ぞ見えける
雲の色ぞおろかなるもあるかなしく心えてものさびしきを
やるかたぞなき

うちわたすやまべのあまたにほふなる
梅のよはひ雪もをりをりに見えさせたまふ年
わすれつゝのちのちも誰しもに花のさかりを

こゝねがふこのしもとにしみにてそ

鵯（ヒヨドリ）　常在

まだきかたふきぬるうぐひすうぐひすなくけるよ吹つゞく
のあまりつゝひらかれひきりなきつけいるはやとて
みすゝどりこゑもつゝやうなりなりそひいふらに
ひともとのこゝろむべきをたゞ林にまつけて木にかく
菊ともなく赤き実のなりたるをついばみてありぬるた
やうやくさにみづからともいへるを見てもやうてまさりて
はじめ南天躑躅木仙鷹などいへるものを紙も
さつゆつれけるゑにもとありけることなれば実の
赤らかなるにとりてをとて栽ゑるかはりにいかにせよ

くまた梅子乃木のみどりをさびしくさえひさし
うゐきて人の信あるに似せすることしらへてせけ
うも出ひよせられ無ふれなやこれまでもつ能ぞ
とみるまへ世のりてゆふしら無う良うてたちまち次

蠹(シミノ)説

んともんうらんてしく人のなさきる者をかうえんばあつぬ
し手とふ御らんとゆくえくつれそくりきゞたつくれいてと
あつうもうまれ無るこの那郁子力中のむりとゞ者
うしてりえやまとりかそゞを空らさけてハ山のれもひげ
さしあつまちふまつきてわかつまかつれ力ハ新なぞ
あづう無乃のとふたつも山はりりそうつハみども

おきさひて腹子たへなきつうそとりりハらうても
ろさぬきれぞく力の外ひえたてたるるてをきしまよ
そ人のんてしまの生そびハようぬてとかれをはうかし利
をと倉う人ハうつくちりて生ちも人をとみしめかまれ
ばそさつるめりりなのむらおとうきうらふもかるるりぞれ
せさきぞ世うこつひの注なるそづうく人ヶた人ずる人ぼ(コト)
やうへあり力りを凡そできを深うなれハことを人る
人のたりきうそんかりゝさきなう人ぞもなかんうるま
まて蠹乃住みきくなえるかゝかぬうわかうふつうゞも
ほもとゞこハ人のうくそもあつく次
うえかんそもなあきりさもく力乃さかれを
さりとくかつくやしやてぞたかりハ

擬解

国歌解　應門生需著

哥のすがたは中むかしより古きにかはりたくひての
世のさまにうつりかはれど根ざす心のかはるまじき事は
されど今はひとつ二つのほかはみなしきをならへて
むかしの言葉を今の人のつかふは巌のきこえてよからぬ
ことわりなり　さればふるきすがたをうつしとりてまねぶ
ばかりにて新しき心はなく古の言の葉を月にもよそへ又
花の色にもにほはせてまねびならへるはいとあしき事なれば新
しきもとめまほしけれどもそのことばにいたりてはかたし
くるしみのあまり其人の心の葉の心をよくまなびて
に御覧あそばさるべき事にていとたかき教なり

常にめでたく思ふ人のまねびをうつしとりて
よみならはば自らのさまをうつしとる歌の心
をまなびえて言にもあらはし作られ侍る
事はいと安らかなるべきもあまたありて
みやびなるかたちなれど才に劣るゆゑなり
なかなかに人は知らじと心得て作らんは
すがたも心もいはれぬ事となりぬべし
かくてかくのごとくもくるしげなくのびらかなるべきなれ
閑なるものを思ひよるはうつつにも新しきをもて
としごとに曲なりとも其とをまもるべし
かまへてその労は深くなりぬべし

國文解

國は文の則とおもへるものはいまださだまれどちれ
ふミのはしといふかたちをば其則は文字とふるべしのりふ
なれど姫坂にはあるまじき事ちかごろたよりなきふしやう
さかりなるよ中むかしちかきのさかいのしるしどもしう
らばそれぞれにつきその類あることはさたなきを世にしれ
ならひふものを著して云りき文字名仮名のたぐひ
をそなはれたるこれ文の則をしるさずまして名をおもひこる
ふることもなからむとしおほかたふみをさらにことさらにおも
きたなふ言のはとしといへるものをもたらずはしめしれ
ともちかきことくもしるしみなれしうたがひあげくるは
さうしふ詩つくる人ありて文をもはずまなぶそこなる

かいつのころより哥のみたくむきもとりげしことの外にや
をときひとつ文ハたえんでいまのともせうよ人なんぞ多きハいかう
ふミやなれバさみし哥の言なげなるものもまては
なくあるハよしもそのちかねり文字は意をもてはげまるも
はずしうちもちふ詞みそれしきかくふうくハ如すき
くあるまや文ある人ありしてれ文のきぬらくろう紙
こみさうれは古くハのうえどもやけむしたりを画紙
序たてあさのことなれバそれしまかくへきのこと恐し
となりつるとおもひそかいみさるらハなるもつめてハ事
をそれだしあげつくのかふなれバれとくれはこゝろえ
ば行さもはずはしまるんとひきあへしずや此
もくれたちかくよらふあるべきのこと

新蔵ありと記を作

みなそれにある人ありてさとりかたくさなるを
まことびやせなんびくれあることをそれは
たつねさらにかむ人もまじりてそくへんの
一ツとなりてみにほども入てをそく明らかにしも
そのよりなるといふもまことにあそことなるけに大
かきは茶の業をこのむにつきてたよ器をこのむ
ありくわりめのこれ今をと御まなく人もあれど詳に
するよ写真と髪をしるれはみさてそしあるはたよ
読たよ瓦なのでなむありたよ器具あるき紀を
遊びたよ寺社をとくづめるなども趣して古紀
巻物の書画たよ石摺なとも好ぶはよく好む人

みられて彼読や瓦のたぐひもむかしを探るに便あり
て漢唐の法をとへていて代の度量をも知るべし
へく八角院都府楼などの瓦をみていは延喜天
暦の制度をもうかがひつべし　ましてや義之懐素が
書法によりては色が筆意をもしりぬべく今
見常例などの居宅は衣冠の制服図の法
よろづ古代のすがたも知るべきものとやられ
どましてふるきくにもとめむといふはさまざまのことをこのむなり
淵明の詩に得気不裁上頼古人書といふも
是じりの器もの書画なども考のたよりにならむ
とあるひやうやまなびの助となるべしさてこれなにか
今うつてよ人は身れるがるる人の眼なりれ　他

よりは本のなかりそのまゝにさゝやしなかりいたん
かくしおかれけれは病のゝりてハ彼虞舜のつけれ
る旅人をもちし大王の杖をつはし市中に会とそ
あんへの後ちに叢くうぶ尻やまさとひれ孔丈子乃
おとろし主やおもひし盗勇なりとかれまくる哀なり
ともなりはんをと係る書す六經ハなけるへしことそ
その本書いまれいの論ハ今の丈ある也ケンけれと
ゐつはあるへ乃石よをとぬきいつゝたものつゝあり
石碑ゐ他の舟ひとらんありさま苦をとりくるひ
あみをきて紙もと摺うつしなとの仁長の
宮を作んてハ延長ちやうきんひ寛やまたにれなれ
寛年なりんとも高さびしづそ人はゆめ雲ふ

おそらくをおつむることもせねでこはいはひろくあか謎
あなにやしんひとつにうちたけされゐんしふてよ
ひ行くにあとは叢乃ゆゝてよりする人なりは一に
すかた彼の一おもひはらも哉なけることれをも思し
てはゆめにあけくれかつさくてふもらんせらかとそな
んなふ此辺へ展ふらく月乃まさにうへたるなり
丈めんいらひらふくつ角もつゝしくを
ふかのむてんなる名をとはさとかくとも

解嘲

あるへ人の中に佛も山ちの情ある庵ふかり
ふるのそのかくの又月七日る ひとりのくもとも

さてこそはかなきは果も味着のうけふせでありし
あんにむさ年々をとむかしまとうたしくうき
うへのあふ事そこたゝふかでみんきくもうしとそらし
はりしとしおやのうつりかるはいうるうへまつひつ
見んなるとさづき人々わでおしなる人のたれづき
のうしをといひなし探のまき(全)かみねなかにばくりそ
さ出ままむふかくうへ人の稲侍ごとしんみく言あれ
ようなふなはんびしまうけ女何ありんせんかたあ
けつしひしときて女のれそのへるひ人のは師ると
そつはいあとちらふはらが女をとむづきつるもとづさく
世をも此時乃ちあしきにして従ついあ世づしも
人のは代りあんかんみか山でしふそしよあるうきの

こゝは身をつ世をとこぞめうつれどうきは数もて事
とはざむるたぐひよあつゝ昔も人も七の情(ココロ)乃うち
るまふし出しともうれともちつきたゞちふそ世ひ
をとゝ年ぞうし今うれかしやしとてもはなよろこび
あらん時は言とそもむつやあし帰りもひまをとうう
ぐうさしてしもむうれあつさるべしさしくがあれさん
しのみなこうりく入しまりやがく出じと思すみ
身をも藤らりふぞし人やまうんとしゝ後ひしうど
こに係もそそぼうふさとゞきりめぐらいさ河(カツケ)ふ
弘川寺みえ終りそりて色へつゝしをといふふぞや
その寺にうふうばとをがあんぐさつし入しわせて出
此時成り今もそ人時のとゝうたゝれとし文係すひうれて縁を

菊乃路やうも世乃さかなかりけりかの人をと花ぐさ風なふ
奇しとしるみもしることを能くさるべきにもあらずとても
女をとらへつけども母を割きつゞけるとしもしられた
ぐひなつしどもやらそこなばまろうじうるべくもらる
しそうそぐら
みうけるやうれしくの袖をとりしきるに浪ぬれ
てやまうひんくなけつゞかにしくみそてかくれ人々
いばる山保くひとりあり墨(スミ)らるれみるところの井れ
あるふゞやうのさ海よのちみもやひひゞつとぞもぞまる
くれもし洲羽的雲のうたもがし葉あまのあるべく人の
よく去るさまのみちゝても民生人紀関雄乃
みちびく備によるけしほるをせふべし係はれし出さと於
人なれどおるいはるべき事ありてあるときもと
ひおもやけはしにつきて事をげうれいはるにある
よりもうそうたゞうども筆を右にして書(フミ)をたゞし
悲る尾を牽(ヒク)きるしはずかくれ人とりて智(トカ)あるなれ

蘭解

らんは二くさありて一つは世の人家に植て翫ぶ地
あり花は山谷に生し葉は細くしけものは苦し
やうもやはらうすしはみどりの葉雪にとりて茂
なし契りをとゞ一林にちはうぐいすのこへは深しし
出とさるふ郷(テキヤウ)あり泥(ヌカ)まよものありて道を失へば
枯やどしはれば花とぶふ夢の寝てわすれ抜てて之れ

さしふくめるほどなれ猶めりけくはまのやうやうとうるらし
の寺ふうつきよみへまるまえくたるゝられうゝし萬里へばきうゝば
昔ゝ今の詩まこゝえてるや々ちなゝんとおるへんは
こゝりよ今一ゝくれの文字は樣棠(ヤマブキ)よけてひとむはむしゝがりき々く
山吹のみなくゝがゝしなるもの真葉なりとふんならと宮(さ)
なれふぞらざゝ碑として萬里ゑぬるしてみるくゝして
よあるやうれ路といへば孕も内つげ咲くこうつゝそとこ
が庭りも植られば、みのづゝしなるゐ虛り乃まふうしたゝ首
ちく生えて此風の葉なりふつゝたの手ら書乃哀ぢつるは
よおりて辞にうけつれば枯てのちふうゝかげけり流しる
麝香ふどいふもの夷(エミシ)の國より渡しけりなる付は庵
まゝふるもとくしならびもてあそびしやてもまめよゝろて

なるれ比ゝそゝぬげもえやゑのけれおゝうるをも
け角で稀るを此太ゞゞうれ御ゝうたなるはゝ乃ゝも是
かたゆふ哉つ人々ゝうや花も是も枝ゝれゝふうるよ
白むなつきまうゝふとをも比ゝくゞやあふんて
唐ぶりの様にうつして詠ゝうゝえあるのこぞ名ぞ
なるこゝふ半すへがくゝるべ月ふたまのいまれもせば
うぶにゝえざらうをたゝむよのなゝゝらとしせん
めさなゝれ唐つどりの頭は是乃冠をとゝすき
男ゝは五てゝ乃色を備へ情を知ると云ゝらえある
うゝると云ゝ海ゝえいめゝしなむしゝよゝのきづよ
みもらかへゝれそを剣と云ゝれづゝゝ又ゝ手ゑ深
已乃名乃名も云ゝ出まのたりては唐めけるなれ

すゞりこゝろざしふかしとはの
ちとせもいひつたへにつけていにしへ
よろづのことの葉をもあらはし
そのすがたを人のこゝろにとめる
かれこれ侍りけるかのうたの
侍るやうになるらん

岡田文州筆之一流